2019 年 1 月 26 日（土）
館山コミセン

安房歴史文化研究会（通算 57 回）

2018 年度第５回 公開講座

安房高等女学校にみる地域教育 ～大正期を中心に

愛沢伸雄
ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラム代表
安房高等女学校木造校舎を保存する会 事務局長

目次

１．はじめに

２．地域教育のなかの安房高等女学校と旧長尾藩士
（１）公立「女学校」創立の経緯と小学校教育に関わる旧長尾藩士
（２）小学校教員養成学校としての安房高女

３．安房高女卒業の小学校教員をみる

４．安房高女の教育に関わった人びと
（１）英語・音楽科教員広瀬フサや露無安（つゆむ やす）と房州のキリスト教
（２）歴史科教員大野太平と万里小路通房・跡見重威
① 大野太平と房総里見氏
② 教え子跡見幾子と校歌作詞者万里小路通房
（３）中山音弥校長と植物学の三好学博士や進化論の丘浅次郎博士との交流
（４）坪野平太郎（南陽）顕彰の「南陽賞」と豊澤藤一郎校長
（５）水泳界の第一人者本田存が結ぶ「カッパ中学」安房中と安房高女

５．大正期の安房における自由教育と児童自由画教育をみる
（１）安房郡各小学校の自由教育と安房高女卒教員・北条小学校
（２）大正デモクラシー期と教育学者原田実（安房中学卒）
（３）洋画家倉田白羊らの安房における児童自由画教育
① 倉田白羊・英子夫妻と小谷仲治郎
② 倉田白羊の美術指導と小学校教員との交流

６．おわりに

１．はじめに

2007 年に安房南高校は創立百周年を迎えたものの、翌年、安房高校と統合となった。関東大震災後に再建された木造校舎は、県有形文化財としての文化遺産であるが、実は現存する学校資料は千葉県の教育史を見るうえで重要なものであるだけでなく、地域の歴史文化を知る上で極めて貴重な資料である。

これまで私は安房の地域を学ぶなかで、人びとが豊かな地域コミュニティをつくり、励まし合い助け合いながら、確かな先人たちの知恵を生かして、生活文化を育んでいく姿を知った。戦乱や災害で文化財や古文書が失われても地域の伝承として、また寺子屋などの教育や社寺仏閣での祭礼という形を取りながら、地域の人びとの思いや願いをしっかりと次代につなげてきた。その地域コミュニティには“平和・交流・共生”の理念があるとし、地域再生には戦乱や災害などを乗り越えていった人びとのエネルギーの源泉をさぐることが重要と感じてきた。なかでもその源流には地域ならではの教育の姿があって、安房では教育が特異な役割を担ってきたのではないかと考えてきた。旧安房南高校の学校資料から、その痕跡の一端をさぐってみたい。

２．地域教育のなかの安房高等女学校と旧長尾藩士

（１）公立「女学校」創設の経緯と小学校教育に関わる旧長尾藩士

最初に明治期の女子教育に関することである。安房高等女学校創立の経緯をみると、日露戦争後に女子中等教育（高女）の必要性が高まっていたので、千葉県当局は県議会に千葉県高等女学校以来の高女設置を提案したものの、財政逼迫のため否決された。だが当時、女子進学者が県下第一位であった安房郡は、高女設置を進めていた太田資行郡長のもと、郡議会では財政上で紛糾したものの、結局は設置が決まった。ただ施設設備が間に合わず、郡立の女子技芸学校という仮の届けで文部大臣の許可を受け、1907 年（明治 40）４月公立では千葉県女子高等学校に次いでの県下２番目の「高女」創立となった。後に初代校長小松崎金次郎は初めから学科課程を高等女学校令に準拠したと述べている。翌年、県立で２番目の東金高女が開校している。

明治期において、学校教育がスタートする背景をみると、全国的には廃藩置県後の藩士たちの存在が大きい。とくに小学校義務教育を進めるには教師の質や数が問題であった。安房高女創立に尽力した太田資行郡長は旧長尾藩主に関わる人物といわれ、まず安房における旧長尾藩士と安房の小学校教育や安房高女との関係をみたい

長尾藩が安房に来た経緯は、大政奉還により徳川幕府が倒れ、薩摩･長州を中心とした新政府が誕生すると徳川家は存続となり、徳川家達には駿河･遠江・三河に 70 万石が与えられた結果、駿河･遠江にあった諸藩が上総や安房に移封されるなかでおきた。駿河国田中藩（藩主本多紀伊守正訥）は、安房国白浜の長尾に移り長尾藩と称された。田中藩は下総国相馬や葛飾両郡にも領地があった。不安と期待を抱いて安房の地に来た藩士や家族たちは、その後の廃藩置県によって４年ほどで長尾藩がなくなったことで、激変の時代を生き抜くこととなった。

藩校「日知館」で学んだ知識と技能を持つ 600 名近くの長尾藩士たちは、それぞれが得意な分野に活路を求めていった。主な旧藩士とその役職をあげる。

藩校日知館	小川徳・宮本敬義・長谷川善蔵／常則・柴垣甚五郎・野村新七郎・寺田仙蔵・東誠一
日知館監察	雨宮信友・熊沢堇・原田吉雄・東権兵衛・成瀬藤蔵・長房包満・池谷信直・富田忠謹 竹田本忠・杉山岩蔵・加茂祐之助・大井貞
算学師範	小沢直治／直光　　家老　遠藤俊臣　　儒官　増田岳陽・石井頼水
漢学	奥田竜湫・石神直喜・熊沢猶龍・芳野金陵・恩田仰岳・城山 父子
算学	古谷道生　直心影流剣術 小野成命・小川是総・杉山秀俊　種田流槍術　　佐竹庸徳

廃藩置県後に東京に出た者や故郷静岡に帰った者、あるいは新天地を求めて全国に向かった者と様々であつた。館山を中心にそのまま残った者は、いわゆる「よそもの」ではあるが、学校教育や地域の商工業の分野に乗り込んでいった。文明開化・富国強兵策のもと急速に近代教育を普及させたい行政当局は、小学校開校準備や教員養成に旧支配勢力であった旧藩士（士族）の力に頼るほかなかった。

館山の北条学区では、長尾藩陣屋が後の北条小学校になっているが、開校時、旧藩士の田村充枝・奥田遵・小沢直治ら３名が教員に任命された。教員名簿などをみると、北条小学校では大井貞・石橋嘉猷・薮崎京治・岩崎彦雄・池谷政治ら、那古小学校では宮本敬義・宇島佐十郎・加茂剛・長谷川常則・竹田録萬らの旧藩士名がある。

長尾藩に関わる資料でも、後年『舊長尾藩士人名及住所　明治三十三年調』が発行され、438 名の旧藩士のなかに千葉県 169 名の氏名と住所があり、『明治 31 年 千葉県安房郡教育會第一回會報』（千葉県安房郡教育会発行）にある会員 125 名の氏名と照合すると、今のところ旧藩士と確実に確認できるのが 12 名、旧藩士の関係者と思われる氏名が３割近く占めている。

つぎに小学校教員として貢献した旧藩士たちの姿を安房高女の子女からさぐり、卒業後、時代の要請のなかで子女たちがどんな役割を果たしていたかを見る。1908 年（明治 41）に義務教育年限６年制が実現し、明治の国民教育体制がつくられたときに、安房高女はスタートしている。当時、静岡県士族出身で静岡県三島高等女学校長であった小松崎金次郎を招いた太田郡長は自身も同県士族であり、学校運営に困難を抱える不十分な施設設備のもと人徳のある小松崎校長の力を借りて、正式の高女昇格させるまで持ち応える必要があった。しかし、郡立安房高女昇格を目前に郡長は小松崎校長を更迭し、東京高等師範出身の新進気鋭 38 歳の八巻嘉作千葉高女教諭を校長に迎えている。

（２）小学校教員養成学校としての安房高女

第２代校長八巻嘉作と親しかった歴史科教員大野太平は、後年の回顧録に「學科目の配當も縣立以上の程度にして卒業生には無試験にて尋常本科正教員の資格を與へられる事にした」という八巻校長の教育方針を書いている。着任後、八巻校長はすぐに授業科目に英語と教育学を加えている。

当時、安房郡の小学校教育問題には教員不足という難題があった。産業振興のために教育への要望は極めて強いが、一方で郡の財政上、他の産業との兼合いもあり大幅な教育費の増額は避けたい意向であった。ただ、女子教員を増やすことで地域教育に応えたいとの思惑があったと思われる。大野太平教諭は八巻校長について「時流に一歩を超越した一見識を有」して、「深く時勢と地方の状況とを洞察」するリーダーシップのある校長と評価している。

結果を見るならば、短期間のうちに安房地域の小学校教員が多数巣立っていくことになる。創立時には入学志願者 48 名、その後追加があり 60 名入学。翌年４月に 46 名入学し、翌々年には 50 名が入学しているので総計 156 名。明治 42 年６月調査では１年 53 名・２年 43 名・３年 37 名の総計 133 名と 23 名減っている。八巻校長は郡立安房高女として再出発するために入学志願者 129 名には編入試験をおこなって、１年 49 名・２年 44 名・３年 36 名の入学を許可し、学年内の個々の学力差を平準化している。明治 43 年４月、校名が変わり定員 50 名に対して入学志願が 66 名となり、選抜試験となった。

明治 44 年３月の第１回卒業者は 35 名、翌年の第２回では 40 名、翌々年の第３回は 40 名が巣立っていった。1913 年（大正２）発行の『一覧表』には進路状況が記載され、それによると第１回卒業者 35 名中の約半数 18 名が小学校教員になり、１名が東京女子高等師範学校に進学している。第２回では 40 名中 18 名、第３回では 40 名中 11 名が小学校教員となった。なお、第３回では千葉師範学校二部に５名と補習科には２名、そして東京女子高師と東京音楽学校に各１名が進学している。

創立以来の３回の入学者数と３回の卒業生数をみると、入学生 156 名がその後 133 名になり、さらに 129 名が編入試験で再編成され、入学時から２割を超えての減少で卒業生は 115 名となった。当初の入学者数の３割を超える 57 名が教育分野に進み、卒業者の約４割 47 名が小学校教員となり、安房高女創立に至った要請にはしっかりと応えるものとなった。建学の精神を固めた八巻校長は３回までの進路先を見届け、1914 年（大正３）に異動した。

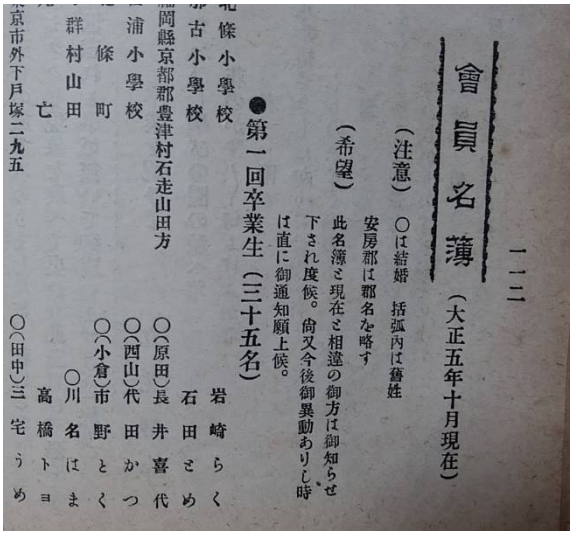
学校資料には、卒業式において保護者に配布した学事報告の一覧表などがあり、そこに記載がある保護者名や住所とともに、1915 年（大正４）に創刊した『校友会雑誌』に掲載された卒業生たちの進路先や結婚後の改姓と重ねみる。大正期の卒業資料と旧長尾藩士資料とを照合し、保護者が旧藩士かどうか、また保護者の子女の進路はどうかを確認した。旧藩士であった保護者（職業）と卒業生名（進路先）を示すと、

岩崎彦雄（小学校教員）・らく（北条小）
原田誠太郎（学校職員）・喜代（結婚）
市野泰孝（活版業）・島つね（北条小）
石橋嘉猷（教員）・みち（船形小）
竹田録萬（小学教員）・なを（東條小）まつ（船形小）
宮本敬義（小学教員）・操（稲都小）
薮崎京治（教員）・菊枝（朝夷小）とし（結婚）
石田勘太郎（会社員）・とめ（白浜小）、
池谷義次（商業）・きよ（結婚）、春江（愛媛県）
池野輔世（商業）・千代（館山小）、
恩田利用（教員）・美津（東京）さなえ（白浜小）
小池藤太郎（技師）・ふじ（平群小）
小林勝春（農業）・文枝（台湾総督府高女転学）

多い事例ではないが、ここから地域教育に関わってきた人びとが、次代に継承している姿があり、教員の仕事を通じて先人の営みや知恵を生かしていったのではないかと感じる。

３．安房高女卒業の小学校教員をみる

安房高女で学んで小学校教員になった卒業生たちは、大正期にどのような教員生活を送っていったかをさぐってみたい。まず『校友会雑誌』第１号（大正４年）から第８号（昭和２年）までを参考に、第1・２回卒業生で小学校教員になった 32 名をみてみる。そこからどのような姿が浮かび上がるか。また小学校教員 32 名の保護者の職業と住所から、安房の小学校教員と地域との関りをみる。


會員名簿（大正五年十月現在）
（注意）○は結婚　括弧内は舊姓
安房郡は郡名を略す
（希望）此名簿と現在と相違の御方は御知らせ下され度候。尚又今後御異動ありし時は直に御通知願上候。
●第一回卒業生（三十五名）
北條小學校　岩崎らく
那古小學校　石田とめ
千葉縣京都郡豊津村石走山田方　○（原田）長井喜代
浦小學校　○（西山）代田かつ
條町　○（小倉）市野とく
群村山田　○川名はま
亡　高橋トヨ
東京市外下戸塚二九五　○（田中）三宅うめ

『校友会雑誌』創刊号（大正４年）～第８号（昭和２年）

第１回卒業生　1911（明治 44）年

	1915（大 4）	1915（大 5）	1917（大正 6）	1919（大 8）	1922（大 11）	1924（大 13）	1926（大 15）	1927（昭 2）
岩崎らく	北條小学校	→北條小学校	→北條小学校	→【結婚】長生郡東郷尋常高等小学校	→	→	→	→東郷尋常高等小学校
石田とめ	白濱小学校	→那古小学校	→那古小学校	→那古小学校	→休暇	→那古小学校	→那古小学校	→那古小学校
西山かつ	南三原小学校	→富浦小学校	→富浦小学校	→富浦小学校	→富浦小学校	→富浦小学校	→富浦小学校	→富浦小学校
		【結婚・代田かつ】						
出口さく	瀧口小学校	→健田小学校	→健田小学校	→北條小学校	→和田小学校	→和田小学校	→和田小学校	→和田小学校
榛澤もん	富浦小学校	→江見小学校	→江見小学校	→江見小学校	→結婚・山本小学校	→山本小学校	→館山小学校	→館山小学校
						【結婚・池田もん】		
間宮せい	結婚【外山せい】→		→東葛飾郡我孫子小学	→君津郡湊小学校	→船形小学校	→船形小学校	→船形小学校	→船形小学校
高橋　包	館山小学校	→館山小学校	→館山小学校	→館山小学校	→【結婚・公文包】（東京市）		→	→（東京市）
福原ふく	根本小学校	→白濱小学校	→白濱小学校	→白濱小学校	→白濱小学校	→白濱小学校	→白濱小学校	→白濱小学校
佐野まつ	西岬東小学校	→七浦小学校	→七浦小学校	→西岬小学校	→【結婚・辰巳まつ】（東京市）		→	→（東京市）
北村きぬ	東葛飾郡明小学校→【結婚】北村（東京市）→笛木角太郎方（北條町）→七浦小学校（大 8）					→（東京市）→		→（東京市）
安西ゑん	東葛飾郡木間ヶ瀬小学校→木間ヶ瀬小学校		→東葛飾郡新川小学校（大 8）	→東葛飾郡野田小学校（大 11）		→	→	→東葛飾郡野田小学校
	【結婚・島野ゑん】							

森　さく　千歳小学校　→千歳小学校→　千歳小学校　→江見小学校　→江見小学校　→江見小学校　→江見小学校　→江見小学校

【結婚・井上さく】

杉田たま　（那古町）　→湊小学校　→湊小学校　→那古小学校　→那古小学校　→那古小学校　→那古小学校　→那古小学校

・・

第２回卒業生　1912（明治 45）年

1915（大 4）　1915（大 5）　1917（大正 6）　1919（大 8）　1922（大 11）　1924（大 13）　1926（大 15）　1927（昭 2）

岩城つる　船形小学校　→船形小学校　→船形小学校　→富浦小学校　→富浦小学校　→（北條町）　→　→（北條町）

【結婚・渡邊つる】

伊東けい　船形小学校　→船形小学校　→船形小学校　→【結婚・齋藤けい】（横濱市）　→　→東京府下豊多摩郡　→　東京市

石井照子　神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校

【結婚・石井照子】

萩野ふく　西條小学校　→西條小学校　→北三原小学校　→北三原小学校→【結婚・田村ふく】（丸村）　→岩井小学校　→岩井小学校

海瀬ふく　田原小学校　→田原小学校　→田原小学校　→田原小学校　→田原小学校　→稲都小学校　→稲都小学校　→稲都小学校

【結婚】

眞田たま　東葛飾郡高木小学校→東葛飾郡高木小学校→（北三原村）→佐久間小学校→佐久間小学校→佐久間小学校→佐久間小学校→　→佐久間小学校

【結婚・川上たま】

川上　つね　東葛飾郡行徳小学校→（夷隅郡勝浦町）→【結婚・石井つね】→　→　→　→　→（夷隅郡）

高梨かつ　八束小学校　→（神戸村）→　→　→　不明

田中たき　瀧口小学校　→（豊房村）　→【結婚・吉田たき】（豊房村）　→　→　→　→（豊房村）

田村けい　天津小学校　→稲都小学校　→稲都小学校　→南三原小学校　→南三原小学校　→南三原小学校　→南三原小学校　→南三原小学校

田村あい　東京女子高等師範学校

→東京女子高等師範学校

→香川県丸亀市丸亀高等女学校

→香川県丸亀市丸亀高等女学校

→東金高等女学校　→東金高等女　→東金高等女　→東金高等女

中村美苗　瀧田小学校　→瀧田小学校　→（瀧田村）→（東京市）　→巣鴨町立仰高小学校　→（瀧田村）→　→　→【結婚・三平美苗】（瀧田村）

安田はつ　北三原小学校　→北三原小学校　→北三原小学校　→北三原小学校　→（南三原）　→　→　●死亡

荒井こと　主基小学校　→主基小学校　→主基小学校　→（八束村）　→　→　→　→　→　→（八束村）

近藤しげ　【結婚・小柴】→【結婚・鎌田】→東京府下西多摩郡桧原村成木小学校→成木小学校→（西多摩郡吉里村）→吉里小学校→吉里小学→吉里小学

木下しゆん　富崎小学校　→西岬東小学校　→西岬小学校　→西岬東小学校　→（豊房村）　→　→　→　→（豊房村）

君塚ゑい　岩井小学校　→岩井小学校　→富浦小学校　→富浦小学校　→富浦小学校　→富浦小学校　→富浦小学校　→富浦小学校

【結婚・安西ゑい】

三平たみ　栃木県那須郡富山小学校→那須郡富山小学校

→東京都在原郡大井町大井小学校　→大井小学校　→大井小学校　→大井小学校　→大井小学校

庄司ふさ　健田小学校　→健田小学校　→健田小学校　→健田小学校　→健田小学校　→健田小学校　→健田小学校　→健田小学校

【結婚・石井ふさ】

島田るい　君津郡関村峯上小学校→（神戸村）→【結婚・岡島るい】（神戸村）→（神戸村）→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校　→神戸小学校

・・

1915 年（大正４）から 1927 年（昭和２）までの動向をみると、未婚で教員を継続７名（22%）・結婚後も教員を継続 15 名（47%）・結婚で退職８名（25%）・結婚後も教員継続するがその後退職１名（３%）・途中から不明１名（３%）となった。安房高女は創立時より女子教員養成学校として、地域に根付きながら大きな役割を果たしてきた。ここでわかることは、７割の女子教員が結婚の有無に関わらず地域の小学校教育に深く関わっていることは極めて重要な事実である。他の地域でもこのような調査がなされていれば比較したいところであるが、いずれにしろ地域に根ざした教育を通じて、安房の女性の権利向上や社会的進出を示している姿ではないかと感じられる。大正デモクラシー期、社会で高まっていた婦人問題や職業問題、あるいは良妻賢母教育に関して、安房高女では具体的にどのような動きがあったかを今後さぐっていきたい。

次に小学校教員になった 32 名の保護者職業をみると、農業 17 名・商業５名・教員４名・銀行員・会社員・公吏・医師・宗教などで、卒業生の地域は北条町８名・那古町４名・神戸村４名・館山町２名・稲都村２名・滝田村２名・豊田村２名で、以下の丸村・北三原村・和田町・長尾村・富崎村・西岬村・豊津村・豊房村は１名であった。

ここでみられるのが、明治期には旧藩士たちが教育分野に関わっていた姿から、大正期では農村部において、それなりの資産形成した農家が子女を教育分野に進ませている姿である。北条や那古の市街地だけでなく、安房地域の全体から広く教員が誕生している意味は大きい。地域コミュニティのなかで中核的存在の小学校は、教育の場というだけでなく、地域の歴史文化の発信地であり、学芸会や運動会という形で人々が集う場である。小学校教員はおのずと地域のコーディネーター役であり、人格的に尊敬される存在であるとともに多様な能力や技能が求められる。その意味でも安房高女では教員養成の教育のあり方が問われていたであろう。

ところで、かつての小谷（平野）仲治郎の居宅（朝夷郡七浦村／現・南房総市千倉町千田）が今もある。許可を得て仲治郎に関わる資料調査をしているが、先般、襖の下張りから明治末期や大正初期の七浦尋常小学校に関わる文書資料が見つかった。そのなかに明治 45 年の『兒童出席簿』文書が数枚あり、尋常第３学年女子 40 名の受持は「訓導 福原ふく」とあった。この「訓導福原ふく」とは、明治 44 年 3 月に第１回として卒業した長尾村滝口出身の「福原ふく」の可能性が高い。長尾村滝口で農業を営んでいる後見人福原祥一朗と、幕末幕府医学所の助教授格という長尾村滝口出身福原代二郎が何らかの関係者とすると、根本村北方にある松岡村出身資生堂創業者福原有信とは親戚関係になる。福原有信は根本村金沢屋の息子小谷仲治郎とも縁者であり、福原ふくが二人の存在と関わっていれば、女性教員の生き方に影響を与えたかもしれない。

４．安房高女の教育に関わった人びと

大正期、安房高女の教育に関わったことで注目される人物を紹介したい。ただし、資料が少なく不明なことが多いので今後とも調査研究していきたい。

（１）英語・音楽科教員広瀬フサや露無安（つゆむ やす）と房州のキリスト教

広瀬フサは、1887（明治 20）年にクリスチャンの広瀬元陸軍大尉の長女として出生。1908（明治 41）年横浜フェリス女学校卒業後、同女学校の教員であったが、２年後に安房高女の嘱託教員として赴任。５年半在職し 1915（大正４）年９月退職。この間で安房高女とクリスチャンや房州キリスト教伝道に関わっていることをあげると、1910（明治 43）年に安房第２基督教会田中則貞牧師の長女うめが立教高女より第４学年に転学、翌年に第１回卒業。同年、後に牧師となる北村健司の姉「北村きぬ（絹子・キヌ）」も卒業し、東葛郡明小学校教員になっている。

後任の露無安（つゆむ やす）は、日本基督教団同志社教会で洗礼（同志社英学校から同志社神学校に進学）を受けた父文治の娘として 1892（明治 25）年に姫路市で出生。京都市同志社女学校普通学部卒業後に専門学部英文科入学し、英語学を学ぶかたわらオルガン演奏習得。1914（大正３）年に卒業し、翌年９月に赴任（23 歳）。３年半在職し 1919（大正８）年退職している。露無安の父露無文治は在学中に新島襄から学ぶとともに、学友の山室軍平（後に日本救世軍指導者）などと活動していた。神学校卒業後、姫路教会や高松教会の伝道師となり、今治教会牧師に就任するとともにアメリカやイギリスの神学校に留学している。今治では伝統的な綿織物業者たちと交流して、地域経済を支えるなど大きな功績をのこしている。

ところで安房のキリスト教伝道は、1897（明治 20）年頃より医師秦呑舟や笛木角太郎らによって朝夷郡健田村大貫で始まった。その地に講義所や集会所がつくられ、秦夫人のオルガン演奏では子どもたちが集まったという。後に佐久間吉太郎らの伝道で信徒が増え、安房大貫教会となっていく。伝道活動の広がりは、この二人のクリスチャン教員の時代とつながっている。1915（大正４）年の第５回卒業高梨いとは、クリスチャンで佐久間村長や千葉県議になった高梨五良の長女で、卒業後横浜フェリス女学校教員（1915～24）になった後に地元に帰っている。

明治末期から大正期において南房総の漁村地域では、キリスト教伝道も重なり病気や教育などの地域

課題への問題意識が高まっていた。そのようななかで千倉の七浦（千田）地域からアワビ漁師たちのアメリカ移民があった。なお、前述の北村きぬが卒業後小学校教員のため県北にいくものの、結婚後館山に戻って笛木角太郎の家にいたこと、その後 1919（大正８）年前後に３～４年間七浦小学校に勤めることになった背景を知りたいと思っている。

（２）歴史科教員大野太平と万里小路通房・跡見重威

①　大野太平と房総里見氏

安房高女歴史科教員には、大野太平という房総地方史研究のパイオニアがいた。1879（明治 12）年岐阜市で出生し、小学校の代用教員をしながら文部省試験検定歴史科免許合格。青森県立第一中学校教諭から千葉県教育会講師となり、1913（大正２）年に歴史科教員として赴任し、大正期の 12 年間在職し教務を中心に校長の学校運営を補佐する役割を果たした。安房高女退職後は 1937（昭和 12）年まで安房水産学校嘱託として在職し、本格的に房総地方史の研究に打ち込み、名著『房総里見氏の研究』（昭和８年）を出版し、千葉県の歴史研究に大きな功績を残した。1944（昭和 19）年 65 歳で没している。

ところで安房高女が創立した翌 1908（明治 41）年に安房中学教員斎藤夏之助（東湾）が『千葉県古事志』を参考に、安房の歴史資料をまとめた『安房志』を出版し、町村順にテーマ毎に編纂したなかに房総里見氏に関するテーマをあげ資料集にした貴重なものがあった。同時に、旧里見家臣の流れをくむという正木貞蔵や元郡長吉田謹爾らが中心となって房総里見氏墳墓の整備事業をはじめている。学校でも地域への理解を高めるために『千葉県地誌略』や『千葉県小学地誌』などの教科書がつくられ、また観光案内的な『安房名勝地誌』などが出版されるなかで、「郷土史」という形で地域にある房総里見氏の歴史や伝承が取り上げられている。

大野太平は、「郷土史」教育形成時に安房高女に赴任し、歴史科教員として小学校教員養成に求められる歴史教育のあり方をさぐりつつ、房総里見氏などの地域史研究の第一歩を歩み出している。その姿勢は地域を礼賛するいわゆる「郷土史」ではなく、史料に基づいた実証的で客観的な歴史研究が積み重ねた結果が、『房総里見氏の研究』になったといえるであろう。

『大野太平日記』（館山市立博物館所蔵）には、家庭のことや自分の体調などを中心に簡潔に日常の動きを記しているが、1913（大正２）年５月３日と４日の安房高女赴任時の日記には、東京霊岸島から「八犬伝中、里見氏の房州」に向かうと書かれているように、房総里見氏の歴史には関心があったと思われる。著書『房総里見氏の研究』の「はしがき」には「書生は美濃の産であるが少年の頃から八犬傳を耽讀し深く房總の天地に憧憬してゐた。その因縁にやゆくりなくも大正二年安房の北條に來り住した…歴史は自分の専攻である、之が小生の里見氏研究に指を染むる最初の機縁であつた。…小生の奉職してゐた安房高等女學校では紀念事業の一として安房人物志を編纂する事となつて…里見正木兩氏の傳に至つては其の資料たる史書記錄系圖類が悉く誤謬撞著に充ちてゐて取捨に迷ひ遂に一行も書き得なかつたのである。…そこで一層研究の必要を感じて徐々に史料の蒐集に着手はしたが…」と記載している。ここからみると、1915（大正４）年の紀念事業の際に関わった安房人物志が契機になり、実証的な研究のために史料収集をはじめたとわかる。

里見氏や正木氏の子孫に関わるという子女が安房高女に在学していれば、大野にとって聞き取りや史料収集に好都合であったろう。そのなかで正木貞蔵・清一郎の家族の子女が入学していた。

②教え子跡見幾子と校歌作詞者万里小路通房

どのような契機で万里小路通房は安房高女「校歌」の作詞者になったのだろうか。校歌は大野太平の草案をもとに、万里小路通房（1848(嘉永元)～1932(昭和７)年）が作詞したといわれるが、『大野太平日記』の 1916（大正５）年６月 15 日に「午後

四時退下、帰途校長と共に萬里小路伯爵邸に立寄り校歌製作の礼を述べ、校歌は草案を作り之を伯爵に添削を乞ひ置きしに、東京大学佐々木信綱博士の添削を受け伯爵より送り」とあったので、製作の経緯は確認できた。

では万里小路通房はどんな人物なのか。通房の父博房は幕末、尊皇攘夷派公卿として国御用掛を勤めるとともに、通房自身も明治天皇とは学問や日常生活をともにしていたという。維新後４年間英国に留学してから侍従職になっている。だが、1890(明治 23)年に侍従職を辞めると北条町新塩場に居住し、翌年には貴族院議員となっている。娘の伴子が佐倉藩主堀田正倫に嫁いだこともあり、堀田農場との技術交流もあった。地域では近代農業技術の第一人者福羽逸人などを招いたり、農家に都会向けのなす・きゅうりなどの促成栽培を指導して、農業を発展させるために大きな功績をのこした。また、地域のスポーツ交流や北条文庫の設置など地域教育や文化振興に貢献している。

日記には第５回卒業生の跡見幾子の名がよく出てくる。大野太平の教え子跡見幾子は万里小路通房と縁戚関係であった。館山町北下台に住む跡見幾子の父親は、転地療養に来ていた跡見重威である。日記には大野太平が赴任した大正２年の半年後、11 月 20 日に「跡見重威翁来校し父の話をなす」とある。この「父の話」とはどんなことであったのだろうか。

跡見重威は、跡見花蹊（1840(天保 11)～1926（昭和２）年）の弟である。花蹊（本名滝野）は幼少から漢学や絵画を学び、17 歳になり京都において詩文や円山応立に絵画を学ぶなど天性の才能を発揮している。大阪で塾を開いていた父重敬が公卿・姉小路家に仕えたため、父の私塾を受け継ぎ女子教育を始め、幕末には京都に塾を移し多くの門人を育てた。維新後、皇族・華族の東京移転があったことで、1870（明治３）年花蹊が東京に移住し私塾を開設すると、京都での女子教育の実績もあり上流家庭の子女が多数集まった。1875（明治８）年、今の跡見女学校を開校し、智徳教育を方針として体育や家政を重視するとともに英語や絵画、和歌、琴曲など独特な教育システムが注目され、その後５年制の課程をとり、高等女学校となっている。翌 1919（大正 8）年に花蹊は辞任し名誉校長となったが、その後継は万里小路通房の娘李子（花蹊の養女）が第２代目校長となって引き継いでいる。なお、戦後の跡見学園は跡見幾子の次男純弘が李子の養子となり、第４代目の理事長になっている。

万里小路家と跡見家とをみると、花蹊の父重敬や弟重威は公卿・姉小路家に仕え、とくに尊王攘夷派のリーダー姉小路公知の妻は、花蹊の姉千代滝であった。重威が公知の側近のとき 25 歳の公知は朔平門外で暗殺されるという、幕末での重要な出来事があった。この公知の後を継いで養子になったのが、万里小路通房の弟公義であった。両家は姉小路家を通じてつながっていただけでなく、大野太平の父理忠は若い時に姉小路家の下士であったという。

これらの関係は、跡見幾子の父重威が来校した際に、「父の話」として確認したことであり、二人は姉小路家の話で盛り上がったものと察している。太平が校歌の作詞を依頼する際に、跡見重威・幾子父子の口利きを推察するのである。日記からみると、校歌が完成した翌 1917（大正６）年、重威は 76 歳で亡くなっている。跡見幾子とは書簡の交流とともに、卒業後の数年、同窓会役員として名を連ねている。なお、旧安房南高校には豊澤藤一郎校長を通じて寄贈された跡見花蹊の書がのこされているが、前述のことが背景にあったと思われる。

（３）中山音弥校長と植物学の三好学博士や進化論の丘浅次郎博士との交流

1917（大正６）年に発行された『校友会雑誌』第３号に中山音弥校長が「光藻に就て」という一文を寄せ、「光藻は黄色鞭藻類の一種で、クロムリナと称する淡水産の単細胞藻類」であるが、「如何にして黄金光を発するか」の研究報告を掲載している。ここで注目するのは、1902（明治 35）に安房中に着任して安房中学創成期に 12 年間在職した中山音弥は、1914（大正３）年に安房高女の第３代校長として赴任している。

中山音弥校長

理科教員である中山が、校長として赴任しても理科教育者として光藻などの観察活動に動き回っていることである。翌年に校長は生徒たちとともに自然観察活動に取り組み、「大正四年九月十九日生徒數名を連れて、豐房村南條へ昆蟲採集に

出掛けた。途中で…小井をのぞいたところが、其の表面に黄金色の光澤を認め生徒等に之を示して、光藻であらうと説明」している。その後、途中の館野村の井戸で、今度は生徒自身が発見し興奮して叫んだとの場面があったことを書いている。後日、生徒たちと再び訪れ、その光藻を汲み取り、今度は顕微鏡観察を実施するだけでなく、一部をビンに入れて東京理科大教授三好学博士に鑑定依頼をしている。生徒たちが自然観察を進めていくために、日本植物学の基礎を築いた第一人者の三好学教授に直接、指導を仰ぎ科学的に実験・観察のあり方を示して、理科教育を自ら実践している。

三好 学 博士

中山校長の 10 数年来の友人という丘浅次郎は、帝大理科大学動物学科からドイツ留学し、東京高師教授になり、進化論の解説書や生物学教科書を多数執筆。1915（大正４）年安房高女で講演し、1915（大正４）年発行『校友会雑誌』第１号には講演録を掲載している。そこには「維新後僅か五十年…進歩はしたが、之れは皆外国のまねをしたのみで自分で工夫したり研究してやつた事は誠に少ない…文明を進めるには、よく物の理窟を研究することが必要で皆の人が知らねばならぬが併し大人よりは子供に知らせた方が結果がよろしい」「子供は生れつき研究して見たいといふ性質を以て…子供から尋ねられた時はよく調べて言ひきかせて研究心を導くがよい」と、小学校での理科教育のあり方を伝えている。

（４）坪野平太郎（南陽）顕彰の「南陽賞」と豊澤藤一郎校長

坪野平太郎は、明治期に外交官や大臣秘書、銀行取締役だけでなく、神戸市長や東京高等商業学校(一橋大学)校長を歴任し、政治や教育の面で大きな功績を残した人物である。1886(明治 19)年東京帝大法科卒業後、病気となった坪野は療養のため北条町に来ている。1 年あまりの滞在時に英語学校を開設するとともに英語やテニスを教えたという。この地が避暑避寒と海水浴場に最適と全国に紹介した人物であり、職を退いた 1914(大正 4)年に、また北条町に居住し英語学校を再開している。1919(大正 8)年に東京小石川に安房育英会をつくり安房出身の在京進学者を支援している。

坪野平太郎

豊澤藤一郎校長

1936（昭和 11）年に出版された『坪野平太郎先生追慕錄』のなかに、安房高女の元校長豊澤藤一郎が一文を寄せている。豊澤藤一郎は 1904（明治 37）年に東京高師出身の歴史科教員として赴任し、1915（大正４）年まで在職していた時代に知り合い、その後に他校に異動したものの再び安房高女の校長として 1919（大正８）年６月赴任したので親しい交流がはじまったという。

当時、坪野の４女晴子は、第４学年に在学していたこともあり、女子教育には強いに関心をもち、病身にも関わらず何度も学校に来て講話をしたという。坪野がどんな講話を生徒たちにしたかの記録はないので、著書『快馬一鞭』（日東堂書店・大正３年）から小学校教育に関わるものを取り上げる。「鞭撻すべき圖畫教育」の提言には「日本の圖畫に關する教育を今一層に擴張して盛んに學ばすやうにしたいものだと希望してをる、多くの子供が會を書くのは天賦の嗜好で、鉛筆でも持たすと直ぐに書く、…その好む所を自然に發展させて行くことが、一番人を育てて行く上に容易い法で、…學ぶ者も教える者も大變に都合が好い」と述べ、「圖畫は由來緻密なる思想を養成するに著るしい効果がある、…美術國たるに關はらず、圖畫の教育が發達してゐないのは一体何ういふ矛盾であらう」「圖畫教育と云ふものを疎かにして置いてはならぬと云ふことを自覺して、之を盛にすることは…觀察を緻密にすると云う上に於いても甚だ必要である」「各地小學生徒の作品を色々寄せて比較研究して、圖畫に就て國民の自覺を促すことが必要であると思ふ」と述べている。その後の倉田白羊らの自由画教育活動とも重なっている提言であった。

坪野平太郎は震災後、北条町から故郷の神戸市に転居し、1925（大正 14）年 65 歳で没した。なお、

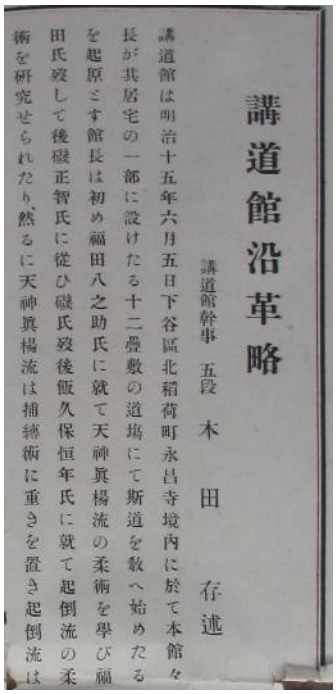
1920（大正９）年３月、第 10 回卒業となった坪野晴子は、震災前後には結婚して神田姓となり、震災後、坪野とともに神戸市に移住している。

南陽(なんよう)の号を名乗り、英語学校の門下生には元館山市長の田村利男や半沢良一のほか、吉田十郎(鏡軒店主・元二中 PTA 会長)らがいるが、人材育成に貢献した師を偲んで南陽会を組織し、慈恩院に顕彰碑を建立するとともに、善行者や学術優秀な生徒には「南陽賞」を与えた。安房高女卒業式では第 17 回（昭和２年３月 17 日）豊澤藤一郎校長が卒業生６名に第１回「南陽賞」を授与し、校長は３月 31 日付で千葉高女に異動している。なお、戦後、安房高では「南陽文庫」を創設し、安房南高でも「南陽賞」を復活した。館山六軒町の諏訪神社境内には、坪野による文撰の碑が建立されている。

（５）水泳界の第一人者本田存が結ぶ「カッパ中学」安房中学と安房高女との交流

本田存（ほんだ・ありや）（1871(明治４)～1949(昭和24)年）は、群馬県館林生まれ、水泳は水府流太田派を極め、柔道は講道館８段。東京高等師範学校（東京高師）の水泳師範として、水泳練習（水練）のため館山湾（鏡ケ浦）に来ていた。当時、日本水泳界を代表する強豪校である第一高等学校と東京高師は北條海岸で水練を実施していた。

嘉納治五郎



講道館沿革略

講道館幹事　五段　本田　存　述

講道館は明治十五年六月五日下谷區北稲荷町永昌寺境内に於て本館々長が其居宅の一部に設けたる十二畳敷の道場にて斯道を教へ始めたるを起原とす館長は初め福田八之助氏に就て天神眞楊流の柔術を學び福田氏歿して後磯正智氏に從ひ磯氏歿後飯久保恒年氏に就て起倒流の柔術を研究せられたり、然るに天神眞楊流は捕縛術に重きを置き起倒流は

柔道の祖・嘉納治五郎と直弟子本田存は 12 歳の違いがあったが、水泳・柔道・講道館事務・東京高師など極めて深い結びつきがあった。本田は海軍軍人を志し、攻玉社で学ぶとともに講道館に入門した。

海軍で必須の水泳を学ぶため太田捨蔵が 1878（明治 11）年に隅田川に開設した水府流太田道場に弟子入りして、後に水府流太田派四代師範となっている。22 歳のときに講道館二段となり、高師附属中学で柔道指導をおこなっている。高等商業学校に附属外国語学校が設置されると 26 歳の本田は韓語学科に入学し、卒業後 29 歳のときに朝鮮語・韓語科の教員になっている。その間、柔軟な考えで柔道を確立してきた嘉納の考えで、流派にこだわらない水泳のあり方を見極めて高師流泳法をつくっていったという。それは嘉納 43 歳・本田 31 歳の理念的に柔道と水泳が結びついていったなかで、東京高師校友会は 1902（明治 35）年に館山北條海岸において水泳部（遊泳部）を誕生させ、嘉納治五郎はたびたび北條海岸を訪れている。

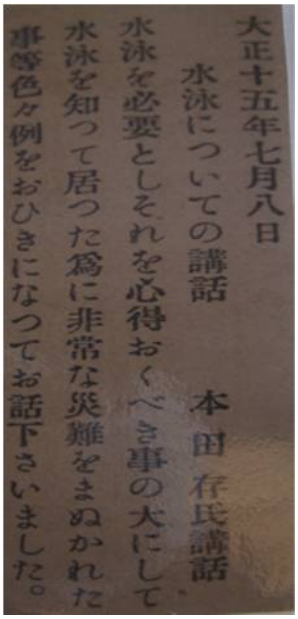
1904（明治 34）年、安房中学が創立され初代校長は東京高師出身の狩野鷹力であった。翌年創部した水泳部は東京高師水泳部と一緒に練習を始め、指導は東京高師の教員に委嘱した。その後明治 40 年度からは水泳技能に優れた卒業生に委嘱したという。1906(明治 39)年、当地で開催された第１回関東連合遊泳大会には安房中学も参加している。

本田存は 1903(明治 36)年から 30 余年北条に住み、開校３年目の安房中学で水泳指導をおこない「カッパ中学」と呼ばれる関東中学大会で常に上位入賞する中学校に育てた。安房高校の『創立 100 年史』をみると水泳部の活躍は目覚ましく、1911（明治 44）年、館山湾で開催された第６回関東水泳大会に東京高師嘉納治五郎校長も来ているが、本田存などの指導もあり、安房中学全種目制覇した完全優勝であったという。

ところで安房中学と安房高女との教員異動では、前述した中山音弥校長や豊澤藤一郎校長は東京高師出身であり、嘉納治五郎校長や本田存水泳師範とは面識あったといえる。なお、1915（大正４年）東京高師研究科に在籍していたオリンピックマラソンランナー金栗四三が安房高女を訪れたのも、東京高師出身中山音弥校長との関係があるかもしれない。1916（大正５）年に本田存は雑誌『柔道』なかで『婦女子の護身法』や『我国の水泳

を発達せしめんが為には先んず女性の水泳を奨励せよ』などの論文を出していることや、東京高師校友会雑誌には明治 40 年代から大正６年まで北條海岸遊泳部（水泳部）実習に本田存の名前がよく出てくるので、大正の初めには安房高女との交流はあったかもしれない。

水泳に関して安房高女をみると、1921（大正 10）年７月、東京府女子師範と東京府立第二高女の生徒 33 名が安房高女寄宿舎に 10 日間宿泊し水泳訓練をしたとされる。そのことに刺激されたのか、翌年７月、安房高女でも全校水泳を実施することになったという。使用する水着は白地に黒の格子の布地を栃木県足利から共同購入して、生徒自ら裁縫して製作している。


大正十五年七月八日
水泳についての講話　本田存氏講話
水泳を必要としそれを心得おくべき事の大にして
水泳を知つて居つた爲に非常な災難をまぬかれた
事等色々例をおひきになつてお話下さいました。

その後、安房中学を「カッパ中学」にした本田存が、安房高女においても講演や水泳指導に努めた記録があるので、安房中学とともにこと大きな役割を果たしていった。夏の全校水泳訓練では大正末期から館山湾の高ノ島や沖ノ島への遠泳大会などが入るなど、徐々に本田存などの取り組みが実って、昭和初期の倍賞義雄校長時代の前後では、水泳部が県大会などで活躍し「カッパ高女」と呼ばれるようになった。

そして、1936（昭和 11）年には日本水連公認番号第 50 号のプールを持つ高女となったことで、安房中学の水泳部が正式に記録を計るときは安房高女のプールを使用するなど、水泳を通じてのスポーツ交流が行われた。

５．大正期の安房における自由教育と児童自由画教育をみる

（１）安房郡各小学校の自由教育と安房高女卒業教員・北条小学校での教育実践

大正期に直面した大きな教育課題では、千葉県での自由教育運動にどう向き合って、地域の小学校と関わっていくかということであったと思われる。1919 年（大正８）年、千葉師範学校附属小学校の主事手塚岸衛は、教師中心の画一的で注入的な教授などの旧教育を批判し、子どもの自発性や自主性を最大限に発揮させる自由教育を提唱した。1921（大正 10）年になり、県内で自由教育の動きが高まっていくと、各地の郡長などが全員で反対決議をした時、折原知事は小学校校長会議では「注入的画一的教育方法ガ漸次改善セラレルコト頗ル喜バシキ傾向」と評価しつつも「個人主義…放任主義ニ陥リ易キ弊害」と指摘し、「之ガ採否ハ学校ニ一任シ」ている。

大正デモクラシーの潮流のなかで、自由で民主的な教育改善の動きは千葉県の教育界に一石を投じ、『千葉県教育百年史 第２巻』には印旛郡とともに比較的早く自由教育を取り入れた安房郡の小学校は、その推進と実績で千葉県のトップであった と記載されている。

安房郡 54 校中、和田小学校・江見小学校・平群小学校・田原小学校・佐久間小学校・滝田小学校・山本小学校・千歳小学校・吉尾小学校・北条小学校・西条小学校・忽戸小学校・富崎小学校・神戸小学校・太海小学校の 15 校が最も優れていたという。

だが、1925（大正 14）年頃になると、自由教育に対する県当局の方針が次第に変化していき、「未ダ新教育ノ精神ヲ極メズシテ教育ノ正鵠ヲ失セルガ如キモノアル…従来ノ所謂一斉画一的授業法ト共ニ速カニ之レヲ打開シテ正道ニ就カシメ」ることを指示した。翌年、手塚は大多喜中学校長に転出という形での文部省から自由教育への干渉となり、1927（昭和２）年には辞職となった。

大正デモクラシーの時代、1923（大正 12）年の関東大震災がもたらした社会不安とともに、国民精神の観念を学校教育に強調する風潮が高まるなかで、自由主義的な風潮から国家主義的なものに変わり、自由教育などの運動は衰退していったといわれる。自由教育先進地であった安房郡の各小学校の教員たちは、変わりゆく時代にどう向き合っていったのだろうか。

自由教育が盛んな小学校の安房高女卒業の教員（年齢）

勤務校	大正８年	大正 11 年	大正 13 年	大正 15 年	昭和２年
和田小学校		出口さく(28)	出口さく(30)	出口さく(32)	出口さく(33)
			田村まつ(17)	田村まつ(19)	田村まつ(20)
				高橋あい(18)	高橋あい(19)
江見小学校	榛澤もん(25)	榛澤もん(27)	森　さく(30)	森　さく(32)	森　さく(33)
		森　さく(28)		平井實子(20)	平井實子(21)
				青木京子(19)	青木京子(20)
平群小学校	小澤きん(20)		椙田けい(23)	池田愛子（20)	池田愛子（21)
				小宮てい（18)	小宮てい（19)
田原小学校	海瀬ふく(24)	海瀬ふく(27)	中村小はる(19)		
		伊東じゅん(18)	伊東じゅん(20)	伊東じゅん(22)	伊東じゅん(23)
佐久間小学校	眞田たま(24)	眞田たま(27)	眞田たま(29)	眞田たま(31)	眞田たま(32)
		平野きぬ(22)	平野きぬ(24)	平野きぬ(26)	平野きぬ(27)
			平野たつ(18)	平野たつ(20)	平野たつ(21)
滝田小学校	磯部きさ(23)	磯部きさ(26)	磯部きさ(28)	磯部きさ(30)	磯部きさ(31)
		小原喜代(18)	小原喜代(20)	小原喜代(22)	小原喜代(23)
山本小学校			笹木なを(18)	笹木なを(20)	笹木なを(21)
			小瀧てる(19)	渡邊　柳(24)	渡邊　柳(25)
千歳小学校		笠貫　宮(24)		座間美津(21)	座間美津(22)
			高濱馨(17)	志村せつ(20)	志村せつ(21)
				田中　綾(18)	田中　綾(19)
					宮下治子(17)
吉尾小学校	池田きみ(23)	池田きみ(26)			
北条小学校	出口さく(25)				
	山田いわ(23)	山田いわ(26)	山田いわ(28)	山田いわ(30)	山田いわ(31)
	富田みち(20)	青木みち(22)	青木みち(24)		
		青木喜代(19)			
		芝崎紀子(18)	芝崎紀子(20)	芝崎紀子(22)	芝崎紀子(23)
		三幣喜代(17)	三幣喜代(19)	三幣喜代(21)	三幣喜代(22)
西条小学校				黒川春子(19)	黒川春子(20)
忽戸小学校		小原喜代(18)	小原喜代(20)	小原喜代(22)	小原喜代(23)
神戸小学校	石井照子(24)	石井照子(27)	石井照子(29)	石井照子(31)	石井照子(32)
		岡島るい(27)	岡島るい(29)	岡島るい(31)	岡島るい(32)
	小野きぬ（19)	小野きぬ（22)	小野きぬ（24)	小野きぬ（26)	小野きぬ（27)
				富田あい（19)	富田あい（20)
				岡本こう(19)	岡本こう(20)
太海小学校	中村静子(20)	鎌田とよ(26)	鎌田とよ(28)	鎌田とよ(30)	鎌田とよ(31)

『北條小百年誌』（昭和 49 年発行）には、大正末期に自由教育の授業を受けた当時の児童の証言がある。「毎日１、２時間目は自習で、あとの時間は自習したことを発表したり、それをもとに討論したりすることで勉強を進め…先生はこの討論に誰もが参加するように、そして常に活発に進行するように、また方向を誤らないよ

うに、皆がうなずける結論となるようにと実に見事に導いて」くれたこと、「理科ではイネの勉強の折に、田の生態（雑草、ウンカ、イナゴ等との関連）までを観察」など、当時の子供たちが自発的で自主的な態度での学習をしていた様子を語っている。

前述のように北条小学校には安房高女卒業の教員もおり、とくに教員志望者の教育実習の場として深い交流が続いていた。安房高女では自由教育の方法を授業に取り入れ、たとえば歴史科の大野太平教諭は、地域学習への理解を深めるために実物資料や郷土資料を教材化して、身近なことを通じて歴史認識を深める方法をとったと思われる。また、理科教育では野外での観察や動植物の採集と分類など、自ら動いて体験する学習方法が取られていた。その痕跡が旧安房南高校理科室に大正期生徒たちが作成した標本となって存在し、当時の面影をみることができる。

（２）大正デモクラシー期に活躍した安房中学出身の教育学者原田実

『千葉県の歴史　資料編近現代８』にある「大正自由教育の展開」の資料「東京日日新聞」（1921（大正 10）年６月 17 日付）をみると、1,000 余名を集めて開催された千葉師範附属小学校主催の「自由教育研究会」は、手塚主事の開会挨拶に次いで「教育時論の主筆で早稲田文学士にして新思想家として定評のある原田実氏が登場」とある。

この原田実（1890（明治 23）～1975（昭和 50）年）は、現在の南房総市丸山本郷出身で安房中学校第３回卒業、1908（明治 41）年に丸小学校で代用教員した後、翌年早稲田大学予科に進み、1913（大正２）年に文学部英文科を卒業している。その後、開発社に入社し「教育時論」記者や編集長になり、その間、1916（大正６）年にはエレン・ケイの『児童の世紀』をはじめ女性問題に関わる著作やトルストイ、ゴーリキーなどの作品を翻訳し、大正デモクラシーにあって世界に関わる潮流を紹介した功績は大きい。安房の自由教育においても、安房中学出身ということで教育問題や女性問題での講演会があったようで、少なからずの影響を安房の人びとに与えたであろう。

なお、1918（大正７）年に斎賀琴子と結婚しているが、斎賀琴子は作家であるとともに平塚らいてうの『青鞜』の社員ということで、原田の生き方に関係あったのではないか。1924（大正 13）年に早稲田大学第一高等学院教授となり、その後早稲田大学高等師範部教授となっている。戦後は 1946（昭和 21）年に早稲田大学文学部教授や早稲田大学図書館長を兼任。1975（昭和 50）年に 84 歳で没している。

（３）洋画家倉田白羊らの安房における児童自由画教育

①　倉田白羊・英子夫妻と七浦小学校学務委員小谷仲治郎（安房水産会）

安房での自由教育の時期に児童自由画教育という注目すべき動きがあった。「東京日日新聞」（1921（大正 10）年３月 30 日付）では、洋画家倉田白羊を中心に安房郡の子どもたちの絵画教育の振興のため北条小学校を会場にして「安房少年絵画展覧会」が開催されるとの記事があった。

倉田白羊は安房郡の教職員に自由画指導のために数回講習や実技を実施してきた成果を、北条小や館山小をはじめ８町村小学校の子どもたちの自作画を出品させて倉田自らが鑑別し 200 余点が入選したという。郡内における初の試みであると記載されている。

洋画家倉田白羊（1881（明治 14 ）～1938（昭和 13 ）年）は、埼玉県出身で漢学者の父務、母静子の２男として誕生。本名は重吉、４歳のころから父に漢学を学び、14 歳で親戚の洋画家浅井忠の門下生となって絵画を習う。1898（明治 31）　年に東京美術学校西洋画科へ入学し、首席卒業。1901（明治 34）年群馬県沼田中学校の美術教員になるが３年後に退職し、時事通信社に入社。記者をしながら絵の製作を続け、第一回文部省美術展覧会に入選。その後、時事通信社を退職して画業に専念し、1922（大正 11）　年に山本鼎らと春陽会を設立するとともに、山本鼎に請われて上田市に移住している。農民美術研究所を通じて、絵画指導をおこなってきたが、1938（昭和 13 ）年に 57 歳で没している。

この倉田がなぜ安房に関わっているのか。浅井忠の絵画指導で房総の風景を描くために南房総に来て

いたが、実は妻英子の実家が根本村であったことから深い縁となった。根本村には明治初期に器械式アワビ漁をはじめた金沢屋の小谷清三郎がいた。英子はその娘であり、兄の小谷源之助や仲治郎は明治期にアワビ漁師としてアメリカに渡っている。教育熱心な小谷家では、娘英子を東京に学ばせるが、入学させたのが、「国際性を備えた、知性豊かな気品ある女性の育成」のために設立したという東京女学館であった。そこで美術教員倉田白羊と出会ったといわれているが、二人が結婚にいたった経緯は不明である。ただ、白羊は学生時代より房総の風景を描きに来ていたので、根本海岸で出会ったのではないかと推察している

② 倉田白羊の美術指導と小学校教員との交流

富崎尋常小学校授業風景（教室に作品展示）

2004（平成 16）年１月、佐倉市立美術館で「倉田白羊展」が開催され、出版された図録には「自由画教育～千葉県安房郡における活動」（木邨かおり学芸員）の論考で、安房郡で倉田白羊が自由画教育活動を始めた経緯が書かれている。そのなかに「大正９年の秋、地元で開催された水産共進会に小学校の図画が沢山陳列されたと聞いた白羊は、格別の興味も持たず訪れ、郡役所から児童画の批評をしてほしい」と言われ、「別に断わる道理もないと一覧した。その後、白羊は海辺に近い土地ということから『我が浦で獲れる海産物』という題で児童画の公募を行った。ほとんどの出品作品は、日本画の紛本などの手本から描いたものであり、白羊は従来の臨画による図画教育が根深く残っていることを知り、近隣の学校での指導を始めた」とある。

北三原小学校の鈴木武雄による美術教育を評価し、「白羊は郡視学や教師に対し、北三原小学校の仕事を参考にして、子供たちが自然を写生することを指導」し、「大正 10 年１月からは北条小学校において、毎週土曜日に石膏像のデッサンの稽古と懇親会を催し、素描教育の効果や必要性を教えた。このような白羊の指導により、館山や那古、北条、九重、南三原、船形等の小学校の図画教育は急速に変化を遂げ」、前述した 1921（大正 10）年の展覧会になっていった。

児童自由画教育活動が盛んな小学校の安房高女卒業の教員（年齢）

勤務校	大正８年	大正 11 年	大正 13 年	大正 15 年	昭和２年
館山小学校	高橋　包（25）			榛澤もん(32)	榛澤もん(33)
	池野千代(23)	池野千代(26)			
	田村けい(24)	田村けい(27)	田村けい(29)	田村けい(31)	田村けい(32)
	鈴木はる(22)	鈴木はる(25)			松坂うた(21)
	森　やす(23)	森　やす(26)	森　やす(28)	森　やす(30)	森　やす(31)
	岩崎りやう(20)	岩崎りやう(22)	岩崎りやう(24)	岩崎りやう(26)	岩崎りやう(27)
	立川　隣（20）	永井しづ(18)	永井しづ(20)	永井しづ(22)	永井しづ(23)
		菊本幽香子(17)	菊本幽香子(19)	菊本幽香子(21)	菊本幽香子(22)
				角田三枝(18)	角田三枝(19)
那古小学校	石田とめ(24)	石田とめ(27)	石田とめ(29)	石田とめ(31)	石田とめ(32)
	杉田たま(25)	杉田たま(28)	杉田たま(30)	杉田たま(32)	杉田たま(33)
	外山たく(18)	外山たく(20)	外山たく(22)	外山たく(24)	外山たく(25)
		平島婦喜(21)	平島婦喜(23)	土方トメ(20)	土方トメ(21)
		山口俊子(20)	山口俊子(22)	西山むめ(19)	西山むめ(20)

北条小学校	山田いわ(23)	山田いわ(26)	山田いわ(28)	山田いわ(30)	山田いわ(31)
	富田みち(20)	青木みち(22)	青木みち(24)		
	出口さく(25)	青木喜代(19)			
		芝崎紀子(18)	芝崎紀子(20)	芝崎紀子(22)	芝崎紀子(23)
		三幣喜代(17)	三幣喜代(19)	三幣喜代(21)	三幣喜代(22)
				平柳富子(18)	平柳富子(19)
九重小学校	神作なか(19)	加藤たま(25)			
	黒川ゆき(18)	黒川ゆき(21)	黒川ゆき(23)	黒川ゆき(25)	黒川ゆき(26)
北三原小学校	笹子はつ(24)			安西つる(19)	安西つる(20)
南三原小学校	田村けい(24)	田村けい(27)	田村けい(29)	田村けい(31)	田村けい(32)
			笹子　恒(17)	笹子　恒(19)	笹子　恒(20)
船形小学校	柴田伊勢（22）	間宮せい(28)	間宮せい(30)	間宮せい(32)	間宮せい(33)
	櫻井とく(20)	竹田なを(22)	竹田なを(24)	竹田なを(26)	竹田なを(27)
	原田貞子(19)	原田貞子(21)		竹田まつ(22)	竹田まつ(23)
	忍足　頴(19)	忍足　頴(21)	忍足　頴(23)	忍足　頴(25)	忍足　頴(26)
	山口俊子(18)	外山　久(17)	外山　久(19)	三好康子(18)	三好康子(19)
七浦小学校	北村キヌ(25)	山口やす(24)	山口やす(26)		
		石井ふさ(20)	石井ふさ(22)	石井ふさ(24)	石井ふさ(25)
			土方トメ(18)	加藤かつ(19)	加藤かつ(20)
				高木しげ(18)	高木しげ(19)

倉田白羊は、1917（大正６）年に妻英子の実家に近い北条町に移住し、６年後には長野県上田に転居する。しかし、その後もしっかりと安房の自由画教育活動に関わっていく。妻の郷里で美術教育に関わっていった背景には、英子の兄小谷仲治郎が大きな役割を果たしていたと推察する。当時、小谷仲治郎は安房の水産会の指導者であったばかりでなく、地元七浦小学校の学務委員であり、安房水産学校の支援者として教育の世界には、強い関心をもっている人物であった。倉田白羊が洋画家として不遇の時代に英子の要請もあり、仲治郎は支援の手を差しのべて苦境を救ったという。子供たちの教育に熱心であった小谷仲治郎を通じて、安房の小学校教員と白羊とは深いつながりとなり、児童画教育研究団「草山会」の結成になった。白羊の上田への転居で活動形態は変わるものの、白羊から受け継いだ美術教育のあり方は、児童自由画展覧会だけでなく、小学校での美術教育実践の中に生かされていったのである。

なお、『北條小百年誌』（昭和 49 年発行）には、児童自由画教育について記載があった。大正末期に自由画の授業を受けた当時の児童は「校庭や学校を囲む風景のどれもがとてもよい写生の対象でした。また鉛筆、クレヨン、水彩だけでなく、クレパス、パステルといった新しい感触の画材を使わせて下さったとき」に興奮したと、その様子を語っている。

安房高女「図画」教科指導のもとでの生徒の作品がのこされている。安房の各小学校の自由画教育実践が反映していると感じるが、調査検討の課題にしていきたい。

６．おわりに

地域コミュニティの再生のためには、旧安房南高校の学校資料から地域で教育がどのように生かされ、位置づけられているかを検証することは重要と思う。人類史的で文化的なものを伝達していく営みや知恵はすべて教育であり、なかでも地域の先人たちの営みや知恵をさぐっていくことなしに、戦乱や災害などを乗り越えていった地域の人びとのエネルギーの源泉を見出すことはできない。

今後とも旧安房南高校の学校資料のなかに、安房高女が地域で果たしてきた役割と教育を見ながら、今後とも安房の先人たちの営みや知恵の痕跡をさぐっていきたい。また、旧千葉県立安房南高等学校（安房高等女学校）木造校舎は、地域の貴重な文化遺産（千葉県有形文化財）であり、市民が主役になる地域づくりの視点から保存活用していきたいと思っている。